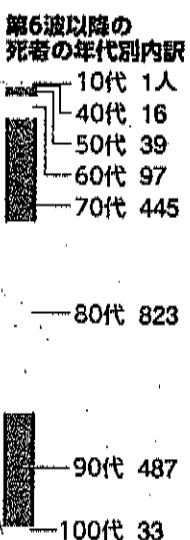


5月19日

大阪府のコロナ死者5000人超

大阪府で新型コロナウイルスに感染して死亡した人は、19日に新たに7人が確認され、5000人となりました。全国の都道府県で初めて5千人を超えた。国内の死者は3万人を超えるが、6人に1人が府内になる。

4割近くの1941人が相次いでクラスター（感染者集団）が多発し、死んでしまう人が相次いだ。



大阪府の新型コロナの「波」ごとの死者数

5月19日時点。府の発表資料を元に朝日新聞が集計

第6波以降にクラスターが発生した施設数は、高齢者施設関連が半数近く約700施設にのぼり、感染者数では約1万2千人を確認した。第4波（昨年3月1日～6月20日）の105施設、1512人や、第5波（昨年6月21日～12月16日）の51施設、584人をいずれも大幅に上回っている。

府内で第6波に続いている死者が多かったのは、第4波（昨年3月1日～6月20日）。医療提供体制が危機的状況となり、自宅で亡くなる人も続出した。また、府内の死者のうち約4割を大阪市内が占めている。第6波では、保健所がパンク状態に陥った。（川田淳史、向井光喜）

想定超えた第6波 高齢者施設で拡大

新型コロナ感染者の死者数が、大阪府で全国最多となっているのはどうしてなのか。特に多くの死者が出た「第6波」の教訓は、府のコロナ政策を担当する藤井謙子健康医療部長に聞いた。

藤井部長は第6波での対応について、「想定して準備していたものと十分にマッチしていないかった」と振り返る。「第6波は死亡率よりも重症化率の方が低かった。重症病床での措置が必要な患者が相当程度出ると、いう想定で備えていたが、

府は「第7波」に備え、介護が必要な高齢の患者を受け入れる臨時の医療施設の整備を進め、「コロナ治療をしながらハビリテーション」を行っている。高齢者のための療養の流れを確立する必要がある」（久保田信厚）

そういう患者はあまり出ず、軽症中等症病床がオーバーフロー（患者数が病床を超過）したとして、想定と異なる対応を迫られたといふ。

第6波では特に高齢の感染者について「想定を上回るものだった。第6波まで全く異なる感染規模（スピードだった）と振り返る。死者が多く出た原因の一

は、府が昨年12月17日の開始とする「第6波」以降。第6波以降の死者は、年齢別では70代以上が9割超を占める。オミクロン株の感染拡大で、高齢者施設などでクラスター（感染者集団）が多発し、死んでしまう人が相次いだ。

第6波以降にクラスターが発生した施設数は、高齢者施設関連が半数近く約700施設にのぼり、感染者数では約1万2千人を確認した。第4波（昨年3月1日～6月20日）の105施設、1512人や、第5波（昨年6月21日～12月16日）の51施設、584人をいずれも大幅に上回っている。

府内で第6波に続いている死者が多かったのは、第4波（昨年3月1日～6月20日）。医療提供体制が危機的状況となり、自宅で亡くなる人も続出した。また、府内の死者のうち約4割を大阪市内が占めている。第6波では、保健所がパンク状態に陥った。（川田淳史、向井光喜）

府は「想定して準備していたものと十分にマッチしていないかった」と振り返る。「コロナ治療をしながらハビリテーション」を行っている。高齢者のための療養の流れを確立する必要がある」（久保田信厚）